

心理臨床における物語の生成

—active imaginationの体験から—

皆 藤 章

Ⅰ 心理臨床における物語の現在

1 物語というパラダイム

心理臨床における「物語」というパラダイムの有効性は近年とみに指摘されてきている¹。当初それは、自然科学的な見方にたいする心理臨床の独自性として打ち出されてきた。その際の根幹にあったのは、心理療法の観点から見てクライアント理解に役立つ見方、という思想であった。すなわち、クライアントという一個人に向き合う心理療法の営みは自然科学のパラダイムのみをもってしてはとうてい理解できないことを、心理臨床家はその実践をとおして実感していたのである。このような自然科学的な見方にたいする不全感、心理臨床における実践トレーニングとして「事例研究」が中心に据えられてきたことと、おそらく無縁ではないだろう。

たとえば、精神医学的な観点に立つと、患者の状態をDSM-IVなどの分類尺度を用いて疾病を決定し、それに応じて薬物を処方していく。このスタイルは、医者—患者関係という要因の個別性を問題としない。必要な専門の知識を学べば患者の疾病分類はどの医者にも可能になるし、薬物の処方も同様である。このような自然科学的パラダイムにおいては、医者と患者との「関係」という要因は排除されているとも言えるのである。

これにたいして、心理臨床においては、クライアント—心理臨床家という「関係」はクライアントを理解する上できわめて重要な要因となっている。この関係は、心理療法のなかで必然的に機能する。心理臨床の歴史はこうした「関係」の探求史であると言っても過言ではないだろう。そして、「転移／逆転移」「投影」「関係性」「間主観性」などの概念でもって、フロイト (Freud, S.) 以来、幾多の研究が積み重ねられてきている。

このようにみると、心理臨床においては必然的に機能する「関係」という要因は、どのようなパラダイムをとおして理解することができるのだろうか、という疑問が生じる。このような疑問にひとつの応えを提示しようとするのが「物語」というパラダイムである。

ここで、何も新たにこのようなパラダイムを提示しなくても、心理臨床においては伝統的に事例研究が行われており、事例それ自体が物語というパラダイムに含み込まれて成立しているのではないかという見解もあるだろう。これにたいしては、わたしも同感である。心理臨床においては、個々のクライアントと心理臨床家による心理療法のプロセスを事例研究というスタイルでもって検討する。そこには特定の個人と個人の関係が展開されている。自然科学的なパラダイムからすると、そのような個別性のある関係を検討することは当事者に役立つことはあっても、そこにおいて展開されている関係は当事者固有のものであって当事者以外の関係とは異なっているということになる。したがって、そこで得られた知をそのまま当事者以外の関係に適用することは

きない。個別性が圧倒的に優位であるから信頼性、客観性、普遍性に乏しいというわけである。

けれども実際は、事例研究に参加し事例を検討することは、当事者以外の関係にも役立つことが非常に多い。また意味ある知恵が得られることも多いのである。たとえば、子どもの事例を検討しているなかで、中年の事例を理解する上で役立つ知恵が得られたりすることがある。すなわち、事例研究においては、「個から普遍へ」というベクトルが機能するのである。この点については、物語との関連で河合隼雄が明解に論じている²。ここで重要なこととして、このベクトルは操作的には機能しないということを指摘しておきたい。事例研究は何よりもまず当事者に役立つものでなければならない。そのために、「普遍」を見出そうとするのではなく当の事例の関係にとって必要なことを見出していこうとするきわめて実践的な姿勢で参加者は事例に臨むのである。そうした姿勢で事例を検討する体験をとおして「個から普遍へ」というベクトルが機能する。換言すれば、物語というパラダイムが機能するには、事例を対象化して客観的に観察するような在りようではなく、事例に入り込んでいく心理臨床的なコミットが必要になるということでもある。

近年の心理臨床における動向を鳥瞰するとき、普遍すなわち客観性を求める強い動きが事例を主体的（心理臨床的）に体験する必要性を阻害する傾向を強くしているように思われる。心理臨床家が行う「見立て」が自然科学のパラダイムに支えられた医師の診断のようになってしまったり、あるいは既存のフレームで事例を理解しようとしたりする強い傾向をうかがうことができるのである。事例が客観性の土俵に載せられるとき、そこに生きるイメージやファンタジーは枯渇し事例は生命力を失っていく。関係という要因を排除しようとするからである。ここに、物語というパラダイムを提示する必要性があると言うことができる。心理臨床における物語というパラダイムは、主体的な体験および関係という要因を抜きにしては考えることができない。本稿では、このような主体的な体験および関係という要因を中心にしながら物語について論じていきたい。

2 パラダイム転換の必要性

「心理療法とは何か」。これは、心理臨床の世界に足を踏み入れたときから一貫してわたしの内にあるテーマである。おそらくは、生涯にわたって考え続けていかねばならないテーマであろう。かつて河合隼雄は、「心理療法とは何か？」というわたしの問いに即答して「わからない」と応えたことがあったが、わたしの理解したところと言うと、それは心理療法の実際体験を言語化することは不可能に近いということの意味するように思われる³。

こうしたことは、別の視角から見れば心理療法をどのように考えるのかというテーマと密接に関連してくる。わたしが受けてきた心理療法の実践トレーニングの根本に息づく思想は、クライアントの症状や問題行動の解消・解決を直接的に目的とするのではなく、あくまでクライアントのリアライゼーションを援助することにある、というものである。そのような思想の下で実践トレーニングを積み重ねながら、わたしの内には徐々にではあるが、個々のクライアントとの心理療法実践をとおして心理療法を鳥瞰的に見る視点が定まってきた。このことは、河合隼雄がとくに指摘するように、自然科学というパラダイムからの転換の必要性和輻輳するものと思われる。すなわち、個々の心理療法実践のなかでわたしは、ある方向ではクライアントを自然科学のパラダイムから理解することは大切であると感じながらも、別の方向ではそのような自然科学のパラ

ダイムによる理解がクライアントとの関係にとって、そして心理療法的関係にとっては、ほとんど何の意味ももたらさないという強い実感を体験していたのである。したがって、わたしにはクライアントを理解する新たなパラダイムが必要であった。その感は、心理療法の場でクライアントに会う度ごとに強まることはあっても弱まることはなく、わたしは個々の心理療法実践の個性を超えて、心理療法全般にたいして新たなパラダイムの必要性を痛感するようになっていったのである。

このような経緯のなかで心理臨床の実践が積み重ねられていった。そして、10年あまりを経て、その実践体験の手応えをとおして、わたし自身にひとつの考え方が形成されていった。それは、次のようなものである。従来の心理療法のパラダイムは、大きくは、フロイト以来の精神分析を中心として発展・展開してきた「治す心理療法」と、ロジャーズ（Rogers, C.R.）が提唱した来談者中心療法を中心として発展・展開してきた「治る心理療法」とに分けることができる。けれども、現代ではそれに加えて、「治す」「治る」といった方法論的思想が無効とも言えるクライアントが心理療法の対象となってきた。たとえば、身体の障害を抱えて生きる人や糖尿病を抱えて生きる人への心理療法的接近が挙げられる。このような場合、心理療法をとおして身体の障害や糖尿病が治るわけではない。そうではなくて、ここにはそうした障害や疾病を抱えながら「いかに生きるのか」というテーマを生きるクライアントと向き合っていく心理療法が必要となるのである。このような事態は、生き方の多様性という現代社会の時代性に心理療法が応えていく必要性を示唆している。心理療法は時代性や文化との相対のなかで変容するのである。クライアントが不治の病を抱えているとき、「治す」「治る」というパラダイムのみをもってクライアントに向き合うのは無力である。それでは、このようなときに心理療法はいかなるパラダイムをもってクライアントに向き合うのであろうか。このテーマにたいするひとつの方向性としてわたしは、「治す」「治る」ではなく、それらを含み込んだ「生きる」という在りようにコミットする必要性を強調し、そうした心理療法を「生きる心理療法」として提唱したのである⁴。

この考え方は心理療法の場を訪れるあらゆる人に適用することができる。そして、この営みを根本において支えるのがクライアントと心理臨床家の「関係」なのである。すなわち生きる心理療法においては、クライアントと心理臨床家の関係に支えられながら、心理臨床家はクライアントがみずからの人生をリアライズしていくプロセスをともに歩むのである。この実践においてはクライアントの症状や問題行動の解消・解決を越えて、クライアントのリアライゼーションを援助することが根幹の目標となっている。「生きる心理療法」を提唱した当時はクリアに意識されていなかったが、現在はこの生きる心理療法の実践を支えるパラダイムは「物語」であるとわたしは考えている。さらに、「治す心理療法」「治る心理療法」の実践においても、次に述べるように、心理臨床家がクライアントの語りを聴くという在り方の内に「物語」のパラダイムが機能しているのである。

3 物語の構造

「生きる心理療法」を支えるパラダイムが物語に依拠するとき、必然的に「物語」の捉え方が重要になってくる。本稿では物語を次のようなフレームで広義に捉えておきたい。すなわち、物語とは「ときに個人を超えることもある人間の体験過程の所産」であり、その構造は「複数の事

象が繋がって筋 (plot) が生成されていくこと」である⁵。その生成のエネルギーや機能に支えられた創造の営みにリアライゼーションが在るのである。心理臨床においては、たとえば「事例」へのコミットや後述される active imagination の体験に物語というパラダイムが機能し、生成の営みが展開されるということができる。

さて、このように物語を捉えると、心理療法においてクライアントの語りを聴くということはそのクライアントの体験過程を聴くことであり、その「語りー聴く」関係をとおして物語が生成・覚醒されていくプロセスをとともにすることであるということができる。すなわち、心理療法とは物語の生成・覚醒を生きる営みなのである⁶。

それでは、このように理解したことで、はたして先述した「心理療法とは何か」というテーマに応えたことになるであろうか。心理療法をこのように述べたところで、それがはたして心理療法固有の在りようを表現していることになるのでであろうか。ここに「物語」というパラダイムの幅広さと奥深さを見ることが出来る。たとえば、先の記述の「クライアント」を「祖母」に置き換えて、「……祖母の語りを聴くということは、祖母の体験過程を聴くことであり……」と述べてみよう。そうすると、それは何も心理療法でなくともベッドサイドで祖母を介護する者の在りようであっても不自然なことはない。さらには、人生は物語であるなどと言い始めたら、人間の営みすべてを物語として理解できそうな気になってくる。

このようにみると、生きる心理療法を支える物語というパラダイムについて、その心理療法における意味を考える必要があると思われるのである。さらにこのことは、「心理療法とは何か」というテーマについて考察することにもつながってくる。そこで本稿では、物語の心理療法における意味を、わたし自身も体験した active imagination⁷をとおして考えてみたい。

II active imagination

1 active imaginationとは

active imagination という用語をユング (Jung, C.G.) が初めて公開したのは、1935年、タヴィストックレクチュアにおいてであると言われているが⁸、ユング自身の体験としては、フロイトとの訣別の後、1912年から1917年にかけてユングを襲った精神病とも言える圧倒的な無意識の力にたいして、それと「対決 Auseinandersetzung⁹」するための技法として用いたのが最初である。定式化された技法ではないが、無意識から生じてくるイメージを相手として、それを観察したり、それと対話したりしながら、そのプロセスを記録していく、というものである。それはまさに、「無意識との対話 Auseinandersetzung mit dem Unbewusstsein」と言うことができるだろう。ユングはこの技法を用いて無意識と対話・対決することによって、分析心理学を確立していくことになった。そのなかでユングは、人間はどこから来てどこへ行くのかという根源的な問いにたいして応えることのできる知恵を神話に求め、自分自身の神話とは何かを探求していったのである。このことは、ユングによる物語の生成と言うこともできるのである¹⁰。このようにみると、active imagination はユング自身にとってもユング心理学にとってもきわめて重要な技法と言うことができる。フォン・フランツ (von Franz, M-L.) も「active imagination は実際のところ、全体性を獲得していくうえで夢の解釈よりもはるかに効果的な、ユング心理学にとって最強のツールなのです」と述べている¹¹。

ところが、このような重要な位置づけにあるactive imaginationは、実際には洋の東西を問わずあまり用いられていない。その理由としてシュピーゲルマン（Spiegelman, J.M.）は、active imaginationが人間を日常から離れた無意識へと導くことと、この技法を実行することが「高度に外向的な社会においては、多くの人々にとってあまりにも難しいから」と述べている¹²。この指摘にたいして河合隼雄は「それは『難しい』のみならず、低く評価されたのではなかろうか」として、イメージやファンタジーの評価が低い文化性をとりあげ、active imaginationは「たましいとの関係を回復し、たましいの望むところを知って生きてゆくための強力な方法である」と論じている¹³。こうしたイメージやファンタジーの観点にたいし老松克博は、あまり用いられていない理由を実際の観点からふたつ挙げている。すなわち、夢の方がより一般的である点、active imaginationという技法の内容を伝えることがむずかしいという点、このふたつである¹⁴。ここで、こうした状況を物語というパラダイムからみると、現代におけるイメージやファンタジー、そしてたましいにたいする否定的在りようは、自然科学のパラダイムが人間の営みに浸透した結果としてもたらされてきたとすることができる。すなわち物語というパラダイムの心理療法における意味は、イメージやファンタジーの復権にあると考えることができるのである。河合隼雄は、「ファンタジーを通してこそわれわれは「たましい」の存在を知ることができるし、ファンタジーを通してこそ「たましい」は、われわれに語りかけることができるのである」と述べているが¹⁵、心理療法はまさにイメージやファンタジーをとおして「たましいと対話する」営みなのである。

それでは、active imaginationとは実際にはどのような体験として語ることができるのであろうか。active imaginationによって生成された物語を取り上げた考察は散見されるが¹⁶、本稿ではわたしが実際に体験したactive imaginationも含めて、物語というパラダイムから考えてみたい。

心理臨床家が自身の夢や体験を語ることは、ないわけではないが稀である。しかもここでは、心理臨床家であるわたしのアナリザント（被分析家）体験が語られるわけであり、事例的に言えばクライアントとしてのわたしが語られることと言える。このような試みはほとんど行われていない¹⁷。内的体験はきわめて個別的なことであるから、当然であろう。けれども、ここではそうした熟慮の末に試みしてみることにした。あえて踏み出したのは、先述したように心理臨床における物語というパラダイムは、主体的な体験および関係という要因を抜きにしては考えることができないからである。そして、シュピーゲルマンが述べるように「心理学的知識とイマジネーションとが、物語の形式で統合される¹⁸」在りようを提示することが、心理臨床における新たなパラダイムとしての物語の生成にとって必要であると考えたからである。そのためは、自分自身の体験をこそ取り上げなければならない。さらにまた、このような新たな試みを行ってこそ、心理臨床におけるパラダイムの転換に関わっていけるのではないかと考えた。

以上のような意図から自分自身の体験を取り上げるわけであるが、ここで、取り上げる自分自身の体験は海外におけるものであり、この点で他に及ぼす現実的影響はほとんどないことを指摘しておきたい。それでは、以降にわたしのactive imaginationに関わる体験を時系列に沿って振り返ることから始めていきたい¹⁹。

2 あるコメントから

およそ20年あまり前、わたしが心理療法の実践トレーニングを受け始めて3年ほどが経っていたころ、ある事例検討の研究会において河合隼雄先生²⁰のコメントに出会った。わたしは、そのコメントを長い間理解することができなかった。それは、クライアントが見た恐怖の夢にたいしてなされたものであった。夢は、『何か訳のわからない怖いものに追いかけて必死になって逃げる』といった内容のものであった。この夢にたいして河合隼雄先生は、「今度クライアントが同じような夢を見たら、怖がらずに頑張ってちょっとふり返ってみたらって（クライアントに）言ってみたらどうだろう。そうするとクライアントはふり返ってみるかも知れない。で、追いかけてくるのは案外かわいい子犬だったりして……」といった内容のコメントをしたのである。わたしはこのコメントに不思議な衝撃を受けた。ただ、それがいったい何のことなのかまったく理解できなかった。率直に、それはわたしにとっては謎であった。わたしの内に謎として居すわり、その後、折りに触れてわたしを刺激し続けたのである。

そもそも、夢自我の働きを意識が操作することはできない。仮に、クライアントがこのようなコメントに応じて、「わかりました。そうしてみます」と言ったところで、それはあくまで意識的応答に他ならない。つまり意識がいくらそれに同意してみても、無意識の活動である夢のなかではそのようにできるはずはないのである²¹。また、心理臨床家がこのコメントに同意し実際の心理療法においてそれを活用するとしても、コメントを十分に理解した上でそうしなければ、たんにアイデアを借りたという程度では何の意味もないどころか心理療法にとって危険ですらあるだろう。活用するためには、このコメントの意味する世界を理解しなければならない。はたして、コメントにあるような夢を巡るやりとりをとおしてクライアントはどのような体験世界を生き、心理療法はどのような営みを展開させていくのであろうか。そうしたことが当時のわたしには理解できなかったのである。

こうしたことは、表現を換えれば「意識と無意識の関係」というテーマに関わることと言えるだろう。このテーマに関する心理学的知識は当時のわたしにももちろんあった。けれども、実際体験として「意識と無意識の関係」というテーマがどのようなものなのか、このコメントを理解するほどには、わたしは手応えをもって知ることができていなかったのである。

また、このテーマに想いを巡らせるなかで、心理療法とはいったい何なのかという本質的な問いが活性化することになった。すなわち、心理療法という営みは、クライアントにどのように役立つのかとか、いったい心理療法の専門性とは何なのかなどといったことについて考えるようになったのである。いま思うと、当時のわたしはほとんど何もかもが曖昧模糊とした心理療法の世界に身を置いていたと言えるであろう。

3 コメントが意味するもの

いまになってみると、河合隼雄先生のコメントがactive imaginationの観点からなされていることは明らかである。このコメントには、心理療法の本質機能である意識と無意識の相互作用が語られている。そこには、夢という無意識からのメッセージを受けて意識がそれに応えていこうとする心理臨床家の姿勢を見ることができる。もちろんそのためには、無意識との相互作用に依えられる心理臨床家の自我の強さがなければならない。おそらくコメントは、当該事例における

心理療法のプロセスをとおして、クライアントの自我が鍛えられ無意識からのメッセージに応えられる段階に来ていることを、事例にコミットして的確に見立てた結果、語られたものであったのだろう。わたしは想うのだが、河合隼雄先生は、クライアントと心理臨床家の関係を基盤としてクライアントの物語が生成されていくプロセスに読み手としてコミットしながら、物語に変化が生まれる兆しを感得したのではないだろうか。そこには、彼の知る既存の物語のパターンがあったのかも知れない²²。それを承知しながらも先生は、クライアントと心理臨床家との関係が生きるところにこそ物語は生成するものであり、またそれは意識と無意識との対話・対決によってこそ生まれるものであることを知っていたのであろう。コメントは明らかに、active imaginationの提案であり、心理臨床家からクライアントに、クライアントによる無意識との対話を促すことへの提案を含みもっている。まさに、心理臨床の本質をまなざしたコメントと言えるだろう。心理療法においては、このような営みをとおして個人の内にイメージやファンタジーが活性化し、その体験により意識が拡充されていく。先述したように、イメージやファンタジーをとおして「たましいと対話する」営みが展開されリアライゼーションへと向かうのである。それは、意識と無意識との相互作用をとおしてなされる。そのようにして、人間は全体性を生きるのである。

4 分析の体験

このコメントに出会ってから3年あまりが経った。コメントの意味は相変わらず分からないままであったが、わたしにとって無意識との対話を必要とする時期に来ていることがある夢をとおしてクリアになり、その夢を契機としてわたしはユング派の教育分析を体験することになった²³。本格的に無意識との相互作用を生きる体験が始まったのである。以来わたしは、10数年に渡って3人の分析家から分析を受けてきた。分析の基本的なスタイルは、毎週一回、夢を記録して分析家のところに持参し、ふたりで夢を検討するというものである。分析家とふたりで夢という無意識からのメッセージの意味を探求するのである。わたしにとってそれは、息の長い地道な作業であった。とりわけ、無意識の扉が開いてその力がわたしを突き上げてくる感じが非常に強く体験されたために、現実（意識）とのバランスをいかに保っていくかがわたしにとっては大きなエネルギーを必要とする仕事のひとつとなった。それはまさに、全体性を生きようとする在りようであったと言える。「現実と夢が車の両輪となって進んでいくことが大切」という分析家のことばもそれを如実に表現している。実際、現実と無意識が車の両輪となって進んでいくプロセスに物語が生成されていくという表現は、現在の時点ではわたしにはまったく適切なものと言える。

分析の体験が始まって6年あまりが経過したとき、分析家は2人目になっていた。このときわたしは、当時勤務していた大学から三ヶ月間の短期在外研究の機会を与えられた。そして、米国在住のユング派分析家であるシュピーゲルマン博士に、短期集中型の教育分析を受けることとなったのである。分析は、1993年5月4日から同年7月27日までの間に週2回を基本として合計25回行われた。

5 夢との対話が始まるまで

1993年5月、わたしはシュピーゲルマン博士に教育分析を受けるために単身で渡米しロサンゼ

ルスに滞在することになった。対処しなければならぬ非常に重要な現実のテーマを抱えていたわたしは、無意識との相互作用による体験に命がけで取り組まねばならないと強く実感していた。日本にいる分析家もそれを強く支持してくれた。単身で渡米していたこともあって、わたしはほとんどの時間を教育分析に費やすことができたし、ほとんどのときをひとりで過ごすことができた。また、当時はインターネットや電子メールの普及率も低く、それらを使用することもなかった。講義の準備や会議に追われることもなく、心理療法の実践においてクライアントと会うこともなく、家庭の諸状況に対応を求められることもなく、わたしは外的な諸々の事態からほぼ完全に解放されて、ただただ自身の内的世界と向き合うことが可能な状況にあったのである。電話や手紙というツールは可能ではあったが、それらに悩まされることも、わたしからそれらを使うこともほとんどまったくなかった。

夢を見たらそれを記録し、その内容について連想、思索を巡らせる。ときには夢イメージと対話を試みる。それがわたしにとって必要なことのほぼすべてであった。わたしはたいてい自室内に居て、ただただイメージの世界に浸る日々を過ごしていた。セッションの前日は、記録をタイプしてドラフトを作った。夢はやはり日本語で見ることが多かったが、ときには英語で見ることもあった。日本で見る夢と比べてみると視覚的印象の強い夢が多かった。visionではないが、それでもvisualなイメージが強烈に残る夢が多かったのである。また、宗教的な夢が非常に多かった。これはシュピーゲルマン博士との教育分析におけるひとつの特徴のように思われる。また、こうした夢の体験は、先述したような米国滞在中のわたしの現実状況に拠るところが大きかったと思われる。米国滞在中、わたしの現実状況は日本に住んでいるときに比べて圧倒的に緩やかであり、わたしにとっての現実というのは身の回りのことに限られていたと言っても過言ではなかった。先に述べたような意識と無意識のバランスという点で言えば、意識の世界にはほとんどエネルギーを向けることなく、ただひたすら無意識との対話にほとんどすべてのエネルギーを費やすことができる状況にあった。

シュピーゲルマン博士のオフィスに出かける日はバスを利用した。20分ほどバスに乗り、最寄りの停留所には30分ほど前に到着するというのがわたしのスタイルであった。セッションが始まるまでの時間はとても貴重で、オフィスの近くを散歩しながらドラフトを思い返しイメージに身を任せながら過ごすのが常であった。数分前にオフィスの扉を開けて待合室で待った。

定刻になるとシュピーゲルマン博士が迎えに来る。セッションは待合室とは廊下を挟んだ向かい側の部屋で行われた。かなり広い分析室の一隅にソファがあった。そこに向き合って座る。心理療法では通常の場合、クライアントと臨床家の間にはテーブルが置かれてありそれが適度の防衛作用をはたしているのだが、この分析室にはテーブルは置かれていなかった。向き合ってみるとたちまちvividに意識されたのだが、テーブルがないとお互いに無防備に全身をさらけ出す状況が生まれた。少なくともわたしはそのようにこの状況を体験した。目線を床に移せばすぐ目の前に博士の足先が見えるといった具合である。これには非常に驚いたが、同時に強い決意で分析に臨まなければならぬと実感した。

セッションの時間は1回45分、ソファの左手の棚に置かれた時計の時刻がときの経過と終了を教える。博士の背後の壁は蔵書で埋め尽くされていた。左側の窓はカーテンで閉じられており外の明るさに比べて分析室の薄暗さが強く体験された。

長身でがっしりとした体格のシュピーゲルマン博士は、ストレートな視線でわたしを見つめる。厳しさと同時に奥に不思議な優しさをたたえる視線は、一途さと誠実さを強く伝えてくる。わたしは、1981年に博士が京都大学に来られてレクチュアをされたときの印象をおぼろげに記憶していたが、当然ながらそのときよりもはるかに厳しい姿勢であることがすぐに感得された。

さて、分析全体をとおしてのプロセスであるが、まずわたしは自分が抱えている現実のテーマについて博士とそうとうに話し合った。この現実のテーマは当然ながら夢にも反映されるわけであり、その後も何度か取り上げられて話し合いがなされた。ただ、話し合いをとおして現実のテーマが解決に向かうことはなく、わたしもちろん解決を目的として話してはいなかった。わたし自身が主体的にコミットし決断していかなければならないテーマであることは、誰よりもわたしが一番よく知っていた。博士との話し合いでは、この現実のテーマは解決へと向かうというよりも、話し合いをとおして深まっていったという印象が強くある。それは結局のところ、「わたしとは何者か」というテーマに収斂していったのである。

6 夢との対話

現実のテーマについての話し合いが一段落した後は、一気に夢との対話に向かっていった。宿舎でわたしは、どの夢を選ぶのかは直観だったが、印象深い夢を見たらその夢をふたたびイメージして、イメージが自律的に動くのに任せながら、夢との対話を行っていった。このことはシュピーゲルマン博士に勧められたわけではなく、あくまでわたし個人の考えで行っていた。これは、いま思えばactive imaginationだったとすることができる²⁴。また、シュピーゲルマン博士は、active imaginationの第一人者であるが、わたしはそのこともほとんど知らなかった²⁵。わたしはただ、夢と日本での教育分析体験とに方向づけられるままに米国に赴き、そこで出逢ったシュピーゲルマンというひとりの人間を相手にして夢との対話を行っていったわけである。このようなことからわかるように、当時のわたしは無意識に強く影響されていたとすることができるであろう。

セッションでは、基本的にはまず夢とその連想、そして夢との対話（active imagination）がわたしから報告され、その後シュピーゲルマン博士からの質問やコメントを交えながら話し合いがなされた。ときには、夢にたいする博士のコミットにわたしが明確に反論したり不満を表明したりしたこともあった。このようなときの博士の態度は素晴らしかった。何よりも夢との対話に命がけで臨んでいるわたしの姿勢を強く支持してくれた。このようなことをとおして、わたしには心理療法における「受容」の意味が体験されていった。そして、ふたりの間には「関係」が築かれていった。ここで、わたしとシュピーゲルマン博士との間に生じていたことを説明する表現としての的確と思われるので、少し長くなるが河合隼雄先生のことばを引用したい。

（箱庭療法においては）、クライアントは自分の内なる自己治癒力のはたらきを箱庭のなかに表現してゆく。それはクライアントがすでに知っている自分の心のなかの状況を表現する、というのではなく、創造活動でなければならぬ、創造活動を通じてこそ治癒が行なわれるのである。ここで不思議なことに、治療者との深い関係がなければ、このような治癒に至る過程がなかなか生じないことである。そして、そのような過程のなかで、クライアントはそれまでの自分の生き方を振り返ってみたり、新しい生き方をまさぐったりする

が、そこには相当に危険が伴うこともある。治療者はその点をよく知っていて、それに対応していかなければならないが、根本的なことは、クライアントの創造活動にあると言っていいだろう。²⁶ (傍点はわたしが付した)。

これは箱庭療法について述べられたものだが、心理療法には創造性が大きくかかっているものであり、この意味では心理療法全般について述べられたものと言ってよいであろう。当時のわたしは、異なる民族の、ことばもスムーズに通じ合わない、ましてやほとんど初対面の相手との間に深い関係が築かれていくことの不思議を体験していた。

さて、セッションはイメージが濃厚に息づく場となり日常の現実からは遠く隔たっていた。米国に滞在中の現実についてはまったく話題にならなかった。教育分析の期間中に、日本ではまず見ないだろうと思われる夢も多く見るようになった。このことは、日常の生活環境(現実)との「関係」やシュピーゲルマン博士との「関係」に支えられて夢が創出されるという在りようをわたしに強く気づかせることとなったし、「普遍的な collective」夢からは「個から普遍へ」というベクトルを強く体験することになった。

7 現実と無意識の関係について

手応えを実感できる分析を重ねて二ヶ月半あまりが経過して、わたしの内には、現実と無意識との関係、とくに無意識との対話・対決が現実すなわち意識にどのように反映されるのかということが大きく意識されていた。それは、夢の体験やシュピーゲルマン博士との対話のなかに、関係(対人および対神)における暴力性、そして関係におけるわたしの在りよう(合理/非合理、ロゴス/エロス)というテーマでもって顕れていた。わたしは、このようなテーマを生きながら、夢の体験やactive imaginationをとおして、何かがりアライズされるのを待っていた。それは、暴力性から創造性というベクトルを生きることであった。

そして、21回目のセッション(7月13日)において、わたしは以上の内容を総括して話した。その内容を博士と確認し合った後、ふたつの夢を報告した。

夢66(7月10日)

わたしは知り合いの女性と一緒に、電車に乗ってデパートのバーゲンセールに行こうとしている。わたしは通路側の席に彼女と向かい合って座っている。

デパートに着く。人混みで一杯である。われわれは家具売り場に向かっている。その途中、知り合いの男性に出会う。彼は親切にデパートの中を案内してくれる。それからわれわれは三人で日本料理店に向かい、個室で昼食をとろうとしている。彼はわたしに彼女を紹介してほしいと言う。わたしは彼女を紹介しながら、彼女が大学のゼミの卒業生で現在は教師をしていると説明する。

知らないうちに、わたしは部屋で眠っている。ふたりの年配の女性が隣室に入ってくるのに気づく。ふたりはとてよやかましい。とうとうわたしの居る部屋にまで入ってきて、まるでそこが自分たちの部屋であるかのように振る舞う。わたしは彼女たちの言動に文句を言う。とそのとき、ひとりがちょうど日本刀のような刀を抜いて寝ているわたしに襲いかかってくる。彼女はこの刀の起源について語る。恐怖を感じたが、わたしは彼女の話の落ち着いて聴いていた。

場面が変わって、わたしは国家権力のような大きな権力に戦いを挑んでいる。わたしにはひとりの若い男性の協力者がいる。われわれは戦場にいる。彼はわれわれのテリトリーを敵から護るために炎を燃やした。そうして彼は、黒人の巨人である將軍に突進し、その首の頸動脈を切った。わたしはその心臓めがけて銃を撃った。將軍は死んだ。そうわれわれは思った。しかし、將軍は先の老女が使っていた刀を引き抜き協力者に近づき、その刀でまさに彼の首を撥ねようとした。彼は降参した。その瞬間、わたしは將軍の頭の後ろに銃口を向けて叫んだ。「降参しろ！」

夢67（7月11日）

場面は古代の日本という感じである。わたしはとある村に向かった。護らなければならない古いしきたりを村の人びとが忘れてしまっていたからである。村人たちのだれもそのことに気づいていない。村に着いたわたしは、何か邪悪なことがこの村にまさに起きようとしているのを感じていた。わたしは神社に向かった。その神社は、とてつもなく長い石段の先にあった。わたしは石段を登る。その頂上には巨木があった。ご神木であった。あまりに大きくなりすぎたためか、地面にひび割れが走って地面がえぐれていた。およそ半分ほどの地面がえぐれて巨大な根が空中に漂っている。わたしは、巨大な根に命がけで飛びつき、その先端に結びつけてあった鈴を鳴らした。

これらの夢を報告すると、もうほとんど時間は残されていなかった。夢を聴いた博士は、「このふたつの夢を素材にactive imaginationをしてきなさい」とだけ、わたしに言った。

シュピーゲルマン博士がなぜこのようなことを言ったのかわたしにはわからなかった。また、なぜこれらの夢なのかもわからなかった。けれども、active imaginationの提案にわたしはまったく違和感がなく、きわめて自然にその提案を受け入れた。おそらく、夢の報告の前にわたしが博士と確認した語りの内容に、active imaginationへのこのころの準備ができていたことを博士は感得したのではないだろうか。その内容はまさにactive imaginationの必要性を語っているとされるからである。先にも述べたように、わたしが語った内容は、現実と無意識との関係とくに無意識との対話・対決が現実すなわち意識にどのように反映されるのかというテーマであり、このテーマはactive imaginationによってもっとも強力にコミットできるものであると思われる。

8 active imaginationの体験

宿舎に帰ったわたしは、さっそくactive imaginationに取り組んだ。ベッドに静かに横になり、夢のイメージを想起し、夢自我に自分自身を同一化させ、そうして浮かんでくるイメージに任せながらそのなかに没入していった。わずかに、右手が自動書記のように記録をとっていた。ひとつの夢にたいするactive imaginationが終わると、しばらく休んで次の夢に進んでいった。

翌日（7月14日）が次のセッションであった（22回目）。そこにおいて、ふたつのactive imaginationをわたしは報告した。

事例1 剣をもつ老女

少しでも眠らなければ。そう思ってわたしは眠ろうとしていた。次第に意識が消えてゆき、眠りの底に落ちようとしていた。とそのとき、老女たちの騒々しい声が聞こえてきた。声は隣室に入っていった。ちくしょ

う。まったく何て騒々しい声なんだ。何てこった。やかましすぎる。わたしはすっかり眠りから覚めてしまった。老女たちが床を踏みならす足音は、さながらヒキガエルが跳び撥ねているようだ。ヒキガエルのように部屋を飛び跳ねている。その足音はわたしの部屋に近づき、そしてなかに入ってきた。何をすつもりだろう……。暗闇に目が慣れていないせいか、老女たちはわたしがベッドに横になっていることに気づいていない。いまだ！ そう思ったわたしは大声で叫んだ。

「こら、静かにしろ！ ここはおまえたちだけの部屋じゃあないんだ！」

するとその瞬間、ひとりの老女が剣を抜いて跳梁し、ベッドに飛び込んできた。老女はわたしにまたがってくる。あつという間のことでわたしは身動きがとれない。老女は剣の背でわたしを押しつけながら激しい声で怒鳴った。

「何を言ってるの！ おまえがいま生きているのは誰のおかげだと思っているの！」

老女の怒りにわたしは恐怖で凍りついた。血の気が失せた。それでも、老女を見つめ続けていた。否、そうするしかできなかったのだ。まるで山姥のような老女は言った。

「この剣の由来をよく聞くんた。この剣は、古の時代、魔性の刀鍛冶が全身全霊を込めて作ったものだ。」老女を見つめながら、わたしにはその剣を作っている刀鍛冶の醜くおぞましい姿が目に見えかけた。そのとき、美しい女性が目の前に顕れてわたしをじっと見つめた。

そのとき、老女は怒鳴った。

「まだ文句があるか！」

わたしにはもはやこのことばが耳には入らなかった。美しい女性は姿を消し、そしてわたしは老女を見つめ続けた。わたしには言いたいことは何もなかった。あらゆることは運命だと思った。老女は剣を頭の上に振りかざし、わたしの胃袋めがけて突き下ろした。剣は腹部を貫いた。胃に焼けるような痛みを感じた……。

(夢66にたいするactive imagination)

これ以上は展開しなかった。イメージがわたしからふっと離れていくのが体験された。ベッドの敷物の色や柄が鮮やかに蘇ってたしかに現実意識が清明になるのがわかった。もちろん、ここからわたし自身の意識の在りようについて考えることはたくさんあったのだが、わたしには、この無意識との対話・対決はそれほど意味あるものには感じられなかった。この内容は、すでにわたしが意識的に把握しているわたし自身であるように思われたのである。

わたしはしばらく休んで、そうして夢67にたいするactive imaginationへと進んでいった。夢67へのコミットは、前者よりもスムーズにイメージに自身を委ねることができた。

事例2 神の樹

田舎の一本道を歩いていた。舗装されていない、土気が舞うような道。そう、わたしはひとりで旅をしているんだ。わたしのことを誰も知らない見知らぬ土地を、わたしは旅している。辺りを見渡すけれども、人っ子ひとり見えない。誰もいないんだ……。見えるのは、一面の田んぼと、そして数軒の家。けれども、人が暮らしているようには見えない。この村には生活の痕跡がまったく感じられない。しーんとして静か。静かすぎて怖くなる。

自分の足音が大きく聞こえるのを感じながら歩いていくと、左手前方に神社の入り口のような感じの所が見える。そこまで歩いて入り口を見ると、巨大な樹木が生い茂っているのがわかる。巨大な樹木は入り口を

完璧に護っている。そう感じられた。さらに入り口に近づいてみる。そこから見上げると無限に続く石段。上方に無限に続く石の階段が見えた。わたしはためらうことなく、入り口をくぐって石段を登り始めた。辺りはしーんとし、物音ひとつしない。登りながらわたしは、樹々の息づかいを感じる。樹はたしかに生きている！

.....

気がつかないうちに、信じられないほどの高さまで登っていた。ふり返ると、家はまるで黒い点のようにしか見えなくなっている。振り仰ぐと、石段はまだずっと先まで無限に続いている。不思議なことに、まったく疲れを感じていない。わたしは、ふたたび石段を登り始めた。

ただ黙々と一心に石段を登り続ける。どれくらいの時間が経っただろう、ふと前を見ると、あと少しで石段が終わっている。とうとう頂上に着いたんだ！

頂上でわたしを待っていたのは、神の樹（God Tree）だった。わたしは聖なる樹を眺める。その気の遠くなるような高さ、齢を無限に重ねて生きてきたその幹の大きさと太さ、完璧な樹形。神の樹はその名の通り神々しさを漂わせていた。

神の樹を眺めていて、ふとわたしは気づいた。樹皮が無惨にも乾燥して縮まり瀕死の状態になっていたのだ。幹のどの辺りからこのようになっているのかと見上げてみても、あまりの高さによくわからない。けれどもわたしは、この樹は枯れていると悟った。指で幹の表面に触れてみる。指先からかすかな音が感じられる。指で触れたところがうっすらと湿り気を帯びてくる。樹皮の表面がほんの少し濡れてきたんだ。まるで、神の樹が涙を流しているようだ。

そう感じると、自分の気持ちをもはや抑えることはできなかった。我を忘れて神の樹にしがみついたわたしの眼から止めどなく涙が零れ続けた。涙を流しながら、声を限りに叫んでいた。「死ねんじゃない！」（実際に、わたしは涙を流していた。そして、この物語が終わるまで涙は止まらなかった）。辺り一面、わたしの嘆きが充満していた。泣きながら、わたしはいまや、生きとし生けるものの象徴としての神の樹を抱いていることを知った。神の樹も、涙を流していた。わたしは神の樹の苦痛に触れていた。少しずつ、少しずつ、わたしは神の樹と溶け合い始めた。まるで涙がわたしを神の樹の内部へと運び込んだかのように、神の樹とわたしは少しずつひとつになっていった。

気がつけば神の樹の中にいた。真っ暗闇だったが、その暗闇の中の一点がほのかに光っていた。何かほのかに輝き空中を漂っていた。神の樹のたましいだ。わたしはそう思った。いまや漆黒の闇と沈黙の只中、わたしは彼女（たましい）と対話を始めた。

「ふれてもいい？」

「そうすれば、あなたの命はないでしょう。」

「でもわたしは、ふれたい。」

たましいはまさにわたしの目の前を漂い、じっとわたしを見つめていた。それから、たましいは美しい黄色の女性に変容していった²⁷。もしわたしが彼女を抱きしめなければ、彼女は間違いなく死ぬ。そのことが、わたしにはよくわかった。わたしは叫んだ。

「だめだ、死んじゃだめなんだ！ あなたを抱きしめたい。」

「もしそうすれば、あなたの命はないでしょう。」

覚悟を決めてわたしは腕を広げる。と、彼女はその腕の中に倒れ込んでくる。長い長い間、わたしは彼女を抱きしめていた。それはまるで、手の中で少しでも力を入れれば簡単に砕けてしまうような宝石を、柔ら

かくそっと抱いているようだった。そのうち彼女は、わたしの心臓を通して少しずつわたしの内に入ってくる。強烈な痛みと熱がわたしを襲う²⁸。それでもわたしは、されるがままになっていた。少しずつ少しずつ、わたしの心臓を通して彼女はわたしの内に入ってくる。彼女が完全に入り切ったそのとき、わたしは気を失い崩れ落ちた。

.....

どれくらいのおときが経っただろう。規則的なリズムをたてている心臓の鼓動にわたしは目を覚ました。それから、小さな穴をぐり抜けて神の樹の外に出た。するとそこは巨大な根の上。下を見ると地面はなく、ただ青い空が見えるばかりだった。そう、わたしは空中に張り出した根の上を歩いているんだ。根の下にはただ青い空。神の樹はその半分が空中に漂っているんだ！

根の遙か先端に鈴が吊り下がっているのが見える。そのとき、彼女の声わたしの内からやってきた。わたしの内なる声が聞こえてきたんだ。声は言う。

「われわれはあの鈴を鳴らさなければならない」。

とても無理だった。鈴は途方もなく遙か遠い。とてもできない。不可能だ。

.....

しばらくの沈黙の後、わたしは尋ねた。

「もしわたしがあなたにふれれば、わたしの命はないとあなたは言った。では、もしわたしが死んだらあなたも死ぬのか」。すると、声は語った。

「長い長い間、誰ひとりここまで来ることはできなかった。実のところ、わたしはほとんどあきらめていました。ちょうどそのとき、あなたがここまでやって来た。あなたがわたしに会いにきたのです。そしてわたしは、あなたにすべてを捧げようとしています。もしあの鈴が鳴らなかつたら、わたしはもはやここに居ることはできません。何処かに行かねばなりません。そのことがわたしの死を意味しているのかどうか、それはわたしにはわかりません」。

.....

「一体誰が、鈴をあんなところに結び付けたのですか？」と、わたしは尋ねた。

「かつて、まだわたしが若木だったころ、ひとりの老人がわたしをこの場所に植えたのです。そのとき老人は、わたしが大きく育つようにと願って自分のお守りの鈴を結び付けたのです。そのおかげで、わたしは大きく成長して神の樹になりました」。

彼女が語り終えるやいなや、わたしは鈴に向かって身を躍らせた。何の躊躇もなく、身体が自然に動いた。鈴を掴んだわたし。鈴は根から外れ、わたしは鈴を手にしながらか空中を下降していった。鈴を手にして鳴らしながらか.....

.....

わたしはまるで空中を漂うかのように、少しずつ少しずつ降りていった。荘厳な鈴の音があたり一帯に鳴り響き、こだまのように反響する。圧倒的な世界だ！ この世のあらゆる樹々が歓喜の声をあげていた。わたしの内にはたましいが生きている。そうして、空気中を漂っていった。わたしという存在とたましいが自然（あらゆる創造物）と溶け合っていた。溶け合い一体となって、そうしてわたしは気を失った。

.....

どれくらいのおときが経っただろう。気がつくとわたしは4、5歳の子どもになっていた。わたしは、石段を一段一段リズムカルに降りていった。もうあと7、8段下りれば地面に着くんだ。そして、地面に降り

立った。何とも言えない不思議な充足感が全身を満たしていた。

わたしは振り仰ぎ、はてしなく続く石段とその先の神社を眺める。そこには、あらゆる生きとし生けるものの息吹が感じられた。わたしは幸福感で一杯だった。

「おーい！」と、大きな声で呼びかけたわたしは、そのまま踵を返して走り出した。

(夢67にたいするactive imagination)

「剣をもつ老女」と「神の樹」というふたつのactive imaginationの事例を語り終えてからわたしは、前者のときには後者の基になった夢67のイメージが侵入してくる感じが体験されて十分なactive imaginationだったが、後者のときは充分なイメージ体験を味わうことができたと話した。シュピーゲルマン博士はわたしの感想に強く同意し、「神の樹」は完璧なactive imaginationだと、少し興奮気味にコメントをした。

「神の樹」は、実に大きな体験だった。わたしという存在がimaginationに委ねられていることの言いようのない充足感と、それを書き記していくactiveな意識が自然な営みを展開し物語を生成していた。このactive imaginationの体験そのものやそこで生まれた物語がわたしという存在を根底から支えているという実感は当時から強くあったが、現在もそれは変わらない。ここで生まれた「物語」とは、これまで述べてきたことから分かるように、その内容のみを指し示すものではない。したがってここでは、その内容にまで立ち入ることはしない。まずは、ここで生まれた物語がシュピーゲルマン博士とわたしとの、そして意識と無意識との相互作用をとおして生成した「体験」そのものであることを強調しておきたい。このようにみると、「物語」とは実体的に捉えられるものではなく、ある機能ないしはエネルギーとして働くと言えるだろう。そのような物語の機能によって「たましいとの対話」が生まれるのである。まさに、物語を実体化・対象化して考察することで得られる知よりもその体験こそが「生きた知」として、わたしという存在に遙かに豊かな息吹を与えたのである。

河合隼雄はactive imaginationについてのユングの考えを紹介し「ユングはこの過程を意識と無意識の統合の過程と考え、それを分析したり解釈したりしなくても、そもそも能動的想像法を行なって記録すること自体が、治療的效果をもつと考えていた」と述べているが、まさに実体験としてわたしもそのように感じている²⁹。

この体験をとおしてわたしは、語られた物語に価値判断や考察を入れ込むようなことをするのではなく、物語が生成・覚醒する体験それ自体を生きることがきわめて大切であることを知った。まさにイメージやファンタジーをとおして「たましいと対話する」ことで個人に新たな生命力が生成するのであり、それこそが自己治癒であり創造なのである。

III 結びにかえて

本稿では、心理臨床における物語にわたし自身が向き合ってきた歴史を述べながら、わたし自身が体験したactive imaginationを取り上げて、心理臨床における物語の意味を考察してきた。そこで見出されたのは、心理臨床においてはイメージ、ファンタジーを生きる在りようを大切にしなければならぬということであった。そのことはすなわち、物語を理解するという姿勢よりも「物語を生きる」という姿勢によってはじめて、物語が新たなパラダイムとして位置づくこと

を意味している。そして、それこそが「生きる心理療法」を支えるパラダイムとしての物語の位置づけと言えるのである。

心理療法が長く依拠してきた「治す」「治る」という思想は、病を実体化・対象化し、自身から切り離そうとする点で、主客の分離を前提とする自然科学的なパラダイムから生まれたものと言える。それにたいして、「生きる心理療法」という思想は、病を自身から切り離すのではなく、病という体験を「抱えて生きる」方途を探ろうとする。このとき、「生きる」営みには「関係」による支えが不可欠になる。「関係」への徹底したコミット（対話、対決）をとおして生成・覚醒する物語の力こそが「抱えて生きる」ことを可能にする力となるのである。つまり、物語の生成こそが心理療法を支え、可能にする力となり、心理臨床における専門性になると言えるのである。

物語にはパターンがある。けれども、大切なことは、そのようなパターンは物語を読む公式にはなってもそれを生きる公式にはならないということである。物語はそのようなパターン化の在りようを超え、個々の関係独自の特徴をもった世界に生成する。そこには、イメージ、ファンタジーが活性化している。この意味で、物語は既存の予定調和的なパターンに抗うと言うことができる。思わぬ展開があったり、偶然の事態が生じたり、予期せぬ流れが生まれてきたりもする。それが物語の特徴なのである³⁰。

最後に、わたしは思うのだが、以上のように物語を位置づけるためには心理臨床家個々が物語を生きる姿勢をもっていなければならないであろう。とくに指導的立場にある心理臨床家は、事例報告を自然科学的な観点で理解しようとしがちになる訓練段階の大学院生にたいして、物語というパラダイムのもつ特徴と、そのパラダイムによって事例報告にコミットする必要性を伝えていかなければならない。こうした努力を怠ると、心理臨床における事例研究の意義は失われ、たんなるパターン化された方法論を学ぶだけの場に墮してしまう。そうなると、心理臨床においてもっとも重要であるとわたしが考えるクライアントに向き合うときの心理臨床家の誠実さ、謙虚さ、真摯さは失われていってしまうであろう。

1 この領域では河合隼雄が先駆的に研究を推進している（『物語を生きる—今は昔、昔は今』小学館、7-33頁、2002年（初出は1996年、『創造の世界』小学館。また『河合隼雄著作集第Ⅱ期 7 物語と人間』2003年、岩波書店所収。）、『心理療法と物語』岩波書店、1-19頁、2001年。『物語と人間の科学』岩波書店、1993年（『河合隼雄著作集12 物語と科学』1995年、岩波書店所収。）。また、心理臨床以外の領域でも「物語」というパラダイムは1990年代以降、さかんに用いられている。たとえば、医療の領域では narrative based medicine という考え方が強く打ち出されてきており（Greenhalgh, T. & Hurwitz, B., 1998: *Narrative Based Medicine*. BMJ Books. (斎藤清二・山本和利・岸本寛史監訳『ナラティブ・ベイスト・メディスン—臨床における物語と対話』2001年、金剛出版)、家族療法の領域では narrative therapy が注目されてきている（高橋規子・吉川悟『ナラティブ・セラピー入門』2001年、金剛出版。また、森岡正芳は人間科学や社会科学の領域における「物語」の動向をコンパクトにまとめている（森岡正芳『物語としての面接』2002年、新曜社）。

2 註1前掲書、『物語を生きる—今は昔、昔は今』7-33頁。

3 私信。

4 『生きる心理療法と教育—臨床教育学の視座から』1998年、誠信書房。

5 「物語による転移／逆転移の理解」『精神療法』第27巻第1号、8-14頁、金剛出版、2001年。同誌には「心理療法と物語」という特集にわたしも含めて6名が寄稿しているが、そのうち「物語」をstoryと表

現している者は3名、narrativeと表現している者は3名であった。「物語」の英訳について、河合隼雄は「物語る」という動詞に的確な英語はないけれども、「物語」という名詞であればstoryになると述べている（註1前掲書、『物語と人間の科学』6-7頁）。また高石恭子は「ナラティブ（narrative）とは、事実を描写する物語、といった意味である。ファンタジーの物語と比べ、自我あるいは意識の関与が相対的に強い物語だと理解すればよいだろうか」と述べているが（高石恭子「聖娼の物語と心の癒しについて」註1前掲書、『心理療法と物語』31頁）、ここでの「ファンタジーの物語」はstoryを意味すると言えるだろう。本稿では物語をファンタジーも含めて広義に捉えているので、その英訳をstoryとしている。

⁶ わたしは、物語を生きる体験には「物語の生成」と「物語の覚醒」のふたつの在りようがあると考えている（註5前掲論文）。物語の生成は個人の体験過程をとおして個人によって物語が産み出される在りようであり、物語の覚醒は個人の体験過程において個人を超えた神話や昔話が個人に喚起される在りようである。

⁷ 定訳はまだないので、本稿では原語をそのまま用いる。河合隼雄は1979年に「アクティブ・イマジネーション」「能動的想像」と表現しており（河合隼雄・谷川俊太郎『魂にメスはいらぬ』朝日出版社）、1994年には「能動的想像法」「active imagination」と表現している（Spiegelman, J.M., 1994: *Active imagination and Story Writing: Individuation and Art*. UNI Agency, Inc. J.M.シュピーゲルマン・河合隼雄著、町沢静夫・森文彦訳『能動的想像法—内なる魂との対話』創元社）。山中康裕・濱野清志・垂谷茂弘は「能動的想像」と訳している（Samuels, A., Shorter, B. and Plaut, F., 1986: *A Critical Dictionary of Jungian Analysis*. Routledge & Kegan Paul Ltd. 山中康裕・濱野清志・垂谷茂弘訳『ユング心理学辞典』創元社、1993年）。また、日本におけるactive imagination研究の第一人者である老松克博は、active imaginationの著名な主導者であるバーバラ・ハナの著書（Hannah, B., 1981: *Encounters with the Soul: Active Imagination as developed by C.G.Jung*. Sigo Press.）の翻訳において「アクティブ・イマジネーション」の訳語を用い（老松克博・角野善宏訳『アクティブ・イマジネーションの世界—内なるたましいとの出会い』創元社、2000年）、同年に出版された自著でも同じ表現を用いている（老松克博『アクティブ・イマジネーション—ユング派最強の技法の誕生と展開』誠信書房）。このような流れを見ると、「アクティブ・イマジネーション」が定訳となっていくと思われる。

⁸ 註7前掲書、『ユング心理学辞典』129-130頁。

⁹ 文脈によって「対話」あるいは「対決」と訳される。また老松克博は「折衝」と訳している（老松克博『アクティブ・イマジネーションの理論と実践1 無意識と出会う』トランスビュー、2004年）。

¹⁰ この点についてはすでに論じた（註5前掲書）。

¹¹ von Franz, M-L, 1981: Introduction. Hannah, B., 1981: *Encounters with the Soul: Active Imagination as developed by C.G.Jung*. Sigo Press. 1-2.

¹² 註7前掲書、『能動的想像法—内なる魂との対話』97-130頁。

¹³ 「能動的想像法について」（J.M.Spiegelman・河合隼雄著、町沢静夫・森文彦訳『能動的想像法—内なる魂との対話』創元社、1994年、3-33頁）。

¹⁴ 老松克博『アクティブ・イマジネーション—ユング派最強の技法の誕生と展開』誠信書房、2000年。

¹⁵ 註9前掲書、26頁。

¹⁶ 註7、9、14前掲書の他、老松克博『アクティブ・イマジネーションの理論と実践2 成長する心』『アクティブ・イマジネーションの理論と実践3 元型的イメージとの対話』（いずれも、トランスビュー、2004年）がある。

¹⁷ 精神分析の領域では、前田重治が分析家の古沢平作から受けた自由連想法体験について語っている（前田重治『自由連想法覚え書』岩崎学術出版社、1984年）。

¹⁸ シュピーゲルマンみずからが提唱する「心理神話学」における考え方。註7前掲書、『能動的想像法—内なる魂との対話』113頁。

¹⁹ プライバシー保護のため、および本稿の意図に沿うように、適宜内容が修正されているが、本質は損なわれていない。

²⁰ 以降の物語に登場する人物には、わたしの体験に合うように敬称を付してある。

- 21 このようなことは瞑想という体験世界のなかで可能になると言われている。けれどもそれはあくまで瞑想であって心理療法とは異なる。またわたしには、瞑想の体験がないので実感（手応え）としてこのようなことを知っているわけではない。
- 22 詩人である谷川俊太郎との対話のなかにも類似の話が出てくる。註7前掲書『魂にメスはいらない』、159頁。
- 23 その夢はごくごく短いものである。3人の分析家とその夢を検討してきたが、そのときも含めて現在まで20年以上が経過している。けれども、いまなおその夢が指し示すことをわたしは理解できていない。それは、わたしや分析家の能力の問題ではなく、わたしがその夢を抱えて生きる必要があるということの意味しているように思われる。それは同時に、夢それ自体にわたしが抱えられて人生を生きることと同じであろう。なお、誤解のないように付言するが、わたしの場合はユング派分析家の資格を取得するために教育分析を受けたのではない。それは、自分自身にとってきわめて逼迫した内的要請によるものであった。
- 24 active imaginationに関する本格的な日本語の書物は註7前掲書『能動的想像法—内なる魂との対話』である。その出版は1994年であり、1993年当時はこの技法に関して述べられた書物はほとんどなく（わずかに註7前掲書『魂にメスはいらない』）、active imaginationについて日本ではまったくと言ってよいほど論考がなかった。
- 25 シュピーゲルマン博士はまた、みずからのactive imagination体験を基にして「心理神話学 (psychomythology)」というジャンルを精力的に開拓している。代表的な著作には次があり、その一部は邦訳されている（註7前掲書『能動的想像法—内なる魂との対話』131-195頁）。Spiegelman, J.M., 1974: *The Tree of Life: Paths in Jungian Individuation*. Phoenix House.
- 26 註7前掲書『能動的想像法—内なる魂との対話』17-18頁。
- 27 この女性は、当時のイメージーション体験から顕れ出た人物である。当時わたしは、おそらくは日本人であろう、幼いひとりの美しい女性の表情を見ることができたのだが、彼女の表情は純粋な黄色であった。彼女は近づいてきたのかも知れないし、離れていったのかも知れない。
- 28 実際、わたしは身体反応を起こしていて、心臓に痛みを感じていた。
- 29 註11前掲書、8頁。
- 30 そして、人生にもまた同様の特徴がある。人間の一生はつねに物語生成のプロセスであると言えるだろう。

（臨床実践指導学講座 准教授）

（受稿2007年9月7日、受理2007年12月12日）

Becoming of Stories in Clinical Psychology: Through the Experiences in Active Imagination

KAITO Akira

The purpose of this paper is to describe the story of active imagination which I had experienced during the term of paradigm II Storyll is a my analyst; Dr. Spiegelman. In recent years, the paradigm "Story" is a matter of concern to almost all clinical concern to almost all clinical psychologists and there are many psychologists and there this paradigm in the clinical psychology. However there are many researches e experiences of the person that told the story. Firstly, I discussed about this paradigm in the paradigm- "Story"-, relating to the paradigm "Modern Science". psychology. However y training process in become a psychotherapist and took up my experiences of dream analysis with Dr. Spiegelman. Finally, I described two of my dreams and stories of active imagination according to those dreams. I propose that it is most important clinically, not only to understand or interpret the story, but to live or experience the story.